

「パウロ、アグリッパ王に語る 1」

2016年09月28日

使徒言行録 26章 1節～8節 アグリッパはパウロに、「お前は自分のことを話してよい」と言った。そこで、パウロは手を差し伸べて弁明した。「アグリッパ王よ、私がユダヤ人たちに訴えられていることすべてについて、今日、王の前で弁明させていただけるのは幸いであると思います。王は、ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じだからです。それで、どうか忍耐をもって、私の申すことを聞いてくださるよう、お願いいたします。さて、私の若いころからの生活が、同胞の間であれ、またエルサレムの中であれ、最初のころからどうであったかは、ユダヤ人ならだれでも知っています。彼らは以前から私を知っているのです。だから、私たちの宗教の中でいちばん厳格な派である、ファリサイ派の一員として私が生活していたことを、彼らは証言しようと思えば、証言できるのです。今、私がここに立って裁判を受けているのは、神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからです。私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んでいます。王よ、私はこの希望を抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。

ユダヤの領主アグリッパは総督フェストゥスから、ユダヤ人たちがパウロを激しく訴えているが、何の罪も認めることができなかつたと聞いた。ところが、パウロは皇帝に上訴したので、囚人としてローマまで護衛しなければならない。しかし、皇帝に罪状を示せないで、貴下に取り調べ、皇帝に何か書き送るようにしたいと要望された。

盛装してユダヤの領主の権威を見せつけていたアグリッパはパウロに、「お前は自分のことを話してよい」と、発言を許した。パウロは手を差し伸べて、「アグリッパ王よ、私がユダヤ人たちに訴えられていることすべてについて、今日、王の前で弁明させていただけるのは幸いであると思います」と話し始めた。アグリッパはユダヤ人であるから、「ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じだからです。それで、どうか忍耐をもって、私の申すことを聞いてくださるよう、お願いいたします」と続けた。異邦人のフェリクスやフェストゥスとは違い、親しみを持っていたことは確かである。それから、パウロは自分の宗教生活について述べる。

私の若い頃からの生活は、同胞の間であれ、またエルサレムの中であれ、ユダヤ人なら誰でも知っている。私はユダヤ教の中で一番厳格なファリサイ派の一員として、熱心な宗教生活をしてきた。このことは、彼らが証言しようと思えば、証言できることである。今、私がここに立って裁判を受けているのは、神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからである。私たちイスラエル十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んできた。パウロは「王よ」と呼びかけ、力を込めて、「神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか」と訴えている。パウロは自分の裁判を、徒な騒動ではなく、先祖に与えられた神の約束の実現に望みを抱いたことであると捉えている。そして、パウロの望みは十字架の死の中から復活した主イエスにおいて、神の約束は実現している。パウロにとって、主イエスの復活こそが救いの福音であった。神が約束した死者の復活をどうして信じられないのですかと問うている。